

## 「学校 行きたくない」

山岡 雅博(本学教職研究科教授 臨床教育学)

いじめ問題調査委員会の調査委員を務めたことがある。継続的にいじめられていたわけではなく、いじめとして認定したのは、机への落書き一件のみであった。しかも、被害者の子どもが自殺したのは、その後2年近く経ってからだった。この落書きといういじめが自殺の一因であるとは認められたが、これだけが原因であるとは考えられなかった。教師たちはいじめの再発防止には配慮したが、この子の自殺を止められなかった。親にも何も告げずに亡くなってしまった。このケースでは、長期間、だれも子どもの生きづらさに気付かず、その結果、自殺を止められなかったことが問題だったと考えている。

日本では、大人の自殺は減少しているが、子どもの自殺は増え続けている。15歳以上39歳までの死因の第1位が自殺である。この傾向は、先進国では類を見ないと言われている。今年6月のNHKスペシャル「若者たちに死を選ばせない」(NHK総合,2021年6月13日放映)という番組では、多くの子どもが自殺した時刻は、登下校の時間帯に重なっていると分析している。さらに、昨年(2020年)のコロナ禍の子どもたちの自殺の増加と大手検索サイトの子どもたちによる「検索ワード」の関連性も調べている。昨年は、1回目の「緊急事態宣言」明けで学校が再開した6月と短い夏休みが終わった8月に自殺者数が急増している。その数日前に急増した子どもたちの「検索ワード」が、「学校 行きたくない」であったという。また、厚生労働省の自殺の統計<sup>1)</sup>と文部科学省の問題行動・不登校などの調査<sup>2)</sup>では、自殺と不登校のそれぞれについて、「学校問題」が最も高い発生要因・原因だった。さらにその内訳は、両方ともに「学業不振」、「いじめ以外の学友との不和」が上位にあった。

昨年度、日本中の学校では、感染対策に配慮し、多くの学校行事を削減して授業時数を確保してきた。これに象徴されるように、子どもたちは「勉強は大切」、そのために学校は休んではならないと強く感じている。格差が拡大している状況で、低学力で負け組になってしまう不安も根底にはあるだろう。簡単には不登校できない。その分、いったん不登校し始めてしまえ

ば、さらに強く自己否定し、長期化する。子どもによっては、学校に行けず、不登校もできなければ、「死」を選ばざるを得ないのではないだろうか。

勉強に対するストレスに加えて、子ども同士の関係も表面的で、友だちに対する気遣いがストレスになっている。「学業不振」や「いじめ以外の学友との不和」の子どもたちには居場所がない。低学力や友だち関係などでひどく傷ついた子どものなかには不安とあきらめ、学校どころではない子どももいる。前出の文部科学省の調査<sup>2)</sup>では、「不登校の要因」のうち「本人に係る状況」の分類では、こういった子は「無気力・不安」とされる。中学では「無気力・不安」が不登校要因の1位で10.1%を占めている。不登校が本人の問題とされれば、教師からの働きかけは弱くなる。

子どもたちの些細な変化に、教師は速やかに気付く必要がある。ところが、校則や〇〇スタンダードを守らせることに傾注していると、子どもたち一人ひとりの変化には気付きにくくなる。子どもを「指導」の対象として、管理的に接していれば、子どもから教師に近づいてくることもあまりない。子ども理解は子どもたちの喜びや辛さなどに対する共感から始めていく。自分のことを理解しようと近づいてくれる教師の思いを感じ取り、安心して心を開くことができるようになっていく。わかり合う関係で子ども理解が進むのである。この関係のもと、子どもたちは自らの課題に気付き、一步を踏み出すことができるようになる。傷付きやあきらめが深いほど時間はかかる。しかし、子どもが孤立し、彼の生命の危機に際して、もし、「聴いてくれる他者」に出会えば、その危機から脱出できる可能性は高くなる。

文献

1) 厚生労働省「自殺の統計：各年の状況」令和元(2019)年

2) 文部科学省「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」令和元(2019)年度